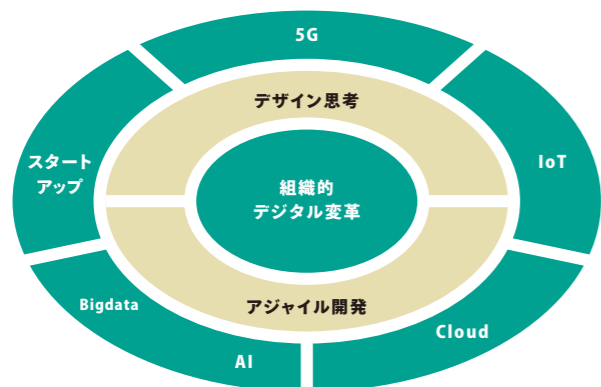


デザイン思考とアジャイルのアプローチでデジタル変革を実現する

KDDI DIGITAL GATE チャレンジ

KDDI DIGITAL GATEを活用し、ひろしまサンドボックス推進協議会会員のアイデアや仮説を起点に、構築・検証・改善をクイックに繰り返し、新たなソリューションの創出を目指します。



KDDI DIGITAL GATEは、日本の企業組織がデジタル変革を実現する場所です。

デザイン思考とアジャイルのアプローチで、人を幸せにする未知のデジタルビジネスを効果的に生み出します。

ここでは、KDDIがこれまで培ってきたあらゆる知見・アセット、パートナーが集まります。

[Learn]



見学、体験

参加企業の社員を集めてGATEでできることや、最新のテクノロジーを体験。固定観念を破壊し、発想の幅を広げます。



[Explore]



ユーザー体験のデザイン MVPの決定

インタビューやワークショップなど、人間中心のアプローチでユーザー体験を可視化。体験価値を向上させる問いを発見し、MVPを決定します。

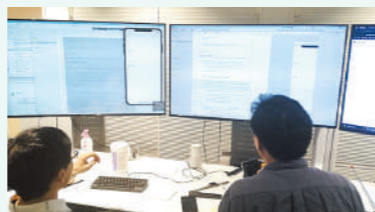


[Build / Validate]



プロトタイプ構築 検証と改良を繰り返す

バックエンドやインフラ環境も含め、実際に動作するプロトタイプを開発。技術的実現性とビジネス的価値の評価を行いながら、改良を繰り返します。



Auto delay time record 電太郎

コンソーシアムメンバー

● 広島電鉄

本プロジェクトは、地域公共交通の乗務員の勤怠実績の集計を自動化しようというもの。勤怠実績の集計以外にも、様々なアナログ作業が残っている同社。業務の効率化に向けたきっかけを掴みたいという思いから、プロジェクトが動き出す。今回は、本プロジェクトリーダーである人事部の進矢氏と、プロジェクトメンバーで日頃給与計算を行なっている部署に所属する平野氏のお二人に話を聞いた。

紙にペン、電卓を手打ちする勤怠管理をデジタル化したい

当社の社員数の大半を占めるのが電車・バスの乗務員です。1日に7,000便を運行し、1,000人を超える乗務員の日々の勤怠管理は今日現在も紙にペンで記録され、電卓で集計してエクセルに打ち直すという、まさに人海戦術です。乗務員の勤怠管理というのは電車・バスの運行ダイヤと勤務時間の組み合わせになるため非常に複雑で、これまで専用システムが全国的にも開発されてきませんでした。驚くことに首都圏の大手鉄道会社さんでも勤怠管理だけはアナログです。そういった背景もあり、正直社内には諦めムードも漂っている部署もありました。ただ、我々はなにか良い方法があるはずだと常々考えていたところ、このプログラムを他部署からの情報提供で知り、すぐに応募しました。(進矢氏)



位置情報で場所を管理し、到着予定時刻と比較

「Auto delay time record電太郎」は乗務員がスマートフォン端末で使用するシステムです。運転席の側に設置し、予め登録された運行ダイヤとGPSで通過する駅の位置情報を利用して、運行時間の管理を行うと同時に到着時刻を自動で打刻することを同時に実現しています。スマートフォンの画面に表示される運行時刻により、乗務員は予定時刻とのズレを目視できますし、これまでアナログ管理してきた勤務実績の記録も画面をタップするだけで完了します。もちろん、運行中は端末に触れることはなく、安全に運行を行うことができます。(進矢氏)

実物を見せることで変わる社内外のムードを実感



先日、「Auto delay time record電太郎」の約1ヶ月の実証実験を無事に終えることができました。乗務員からは時間管理がしやすくなったなどの評価や、機能に関する前向きな改善の意見も多数集まりました。乗務員が手袋をつけているとスマートフォンを操作できないという盲点も初日に発覚するというアクシデントもありましたが、アプリのエラー状況をはじめ、乗務員の実際の意見を聞くことができたので、価値のある実験ができたと思います。また、普段給与計算業務をしていると乗務員の方と直接お話しする機会は少ないのですが、そういった部署の垣根を超えたコミュニケーションのきっかけになりましたし、私自身の仕事の背景を実際に見ることができたことは個人としても大きな収穫でした。(平野氏)



開発されたアプリAuto delay time record 電太郎の画面

実証実験中の運転席 運行時刻が表示され、予定時刻との差がわかる

エキサイティングなプログラム、機会があればまた参加したい

KDDI DIGITAL GATE チャレンジは、大変優秀なファシリテーターの元、厳密に管理されたスケジュールの中で、常に頭をフル回転させながら、アイデアを具体化していくプログラムで本当に刺激的でした。このプロセスを社内の多くの人が体験したら、会社の機運も大きく変わるのではないかとと思うほど新鮮で、有意義でした。我々プロジェクトメンバーだけではまず出来ない、そして様々な方の協力があったからこそ出来た経験だと思います。(平野氏)

とにかく試しにやってみて、そこから検討を重ねていくアジャイル開発を実際に体験できたことも貴重な体験でした。これまでの当社の課題解決プロセスでは、間違いなくこの短期間で実証実験までたどり着くことはできなかったと思います。あまりにも考え方の違う方法でアウトプットをしたことで、社内にこのスタンスをどう説明するか困るくらいです(笑)。我々がプログラムに参加するにあたり綿密な計画をたて、リハーサルを重ねてご一緒くださったKDDIの方々には本当に感謝しています。(進矢氏)

まずは実業務に実装し、ゆくゆくは広島モデルとして全国に発信したい

たくさんの方と関わる機会を頂けて楽しかったです。結果がどうなるかわからない中、とりあえずやってみようというチャレンジができるのはこのプロジェクトの魅力で、アプリ開発と実証実験までできたことは、とてもいい経験でした。(平野氏)

当社におけるバックオフィスのデジタル化は、長年着手できていない課題でした。本プログラムをきっかけに実際の課題にも、社内の雰囲気にも風穴を開けられたことは大きな成果だと思います。当社のようなアナログ管理の企業が参加できたプログラムなので、広島のみならず全国にも身構えず挑戦してほしいです。(進矢氏)

取材協力

広島電鉄 進矢氏
広島電鉄 平野氏

